

中南米諸国の今を

どうみるか

— 留学・訪問体験から —



報告者 辻 義之介 さん
(法政大学社会学部
メディア社会学科
2年生)

日時 2019年12月18日(水)
17時50分~19時

場所 法政大学社会学部棟
(6号館) 715教室



今年度の荒井ゼミ3では、昨年度の学習を引き継ぎ、中南米の民衆の社会運動・学習運動に注目した学習を行っています。そうした中で今秋、講義「社会を変えるための実践論」の受講生で、今年、中南米を歩いて回ったという辻義之介さん(社会学部2年生、田嶋ゼミ)と出会い、是非、実際に見てきたことをお聞きたいということになりました。そこで、辻さんのご都合に合わせ、通常のゼミの時間・教室(木曜日4時限目618教室)を変え、上記の日時・教室で公開学習会を行うことにしました。

辻さんはコスタリカの公立高校に留学した体験もあり、今春は中米諸国を、今夏は南米諸国を訪問したそうです。とりわけ今夏に訪問したボリビアでは、鉱山に入って、そこで働いている子どもに話を聞くこともできたとのことでした。

コスタリカは「軍隊を捨てた国」として、その挑戦的な姿勢が日本でも久しく注目されてきました。ボリビアでは、先住民で自身も子どもの頃から労働に従事していたモラレス大統領が、社会改革を進める中、子ども労働組合に集った「働く子どもたち」の強い要求を受けとめ、一旦引き上げた児童労働の年齢制限を、2015年、ILOの方針に違うことを覚悟の上で引き下げ、働く子どもの「労働環境」改善を優先する施策へと政策を転換しました。これについては講義「社会を変えるための実践論」でもドキュメンタリーを鑑賞し、その講義の中で話し合いました。

1960年代から80年代初めまで続く軍事独裁政権による圧政を乗り越えて中南米諸国で高まった民衆運動は、「もう一つの世界は可能だ」として2001年にはじまる世界社会フォーラム等を生み出すなど、社会正義の実現を目指す世界的な社会運動を30年近くリードしてきました。しかし、ボリビアのモラレス大統領は先月2019年11月、メキシコに亡命することになりました。近年メキシコ、アルゼンチンで左派政権が復活する一方、ブラジル、チリ、ウルグアイでは右派政権が復活し、ブラジルではアマゾン開発政策方針の下、熱帯雨林火災が放置され、チリでは公共料金値上げとその反対運動に対する凄惨な弾圧等が日本でも報道されています。

日本では中南米の情報は今なおあまり報道されません。中南米に限ったことではありませんが、日本に伝えられる諸外国の情報は、国内の情報以上にその信憑性の判断が容易でなく、解釈はさらに難しくなります。

一体、何が起きているのか。それぞれの場にはどんな雰囲気か漂っているのか。

辻さんのお話をもとに、他の参加者が持っている情報も交流させながら日本からみれば地球の反対側にあるといえる中南米の国々と人々の今について一緒に思いを馳せませんか。(荒井容子)